

自動不安定装置

——ティム・オブライエン『本当の戦争の話をしよう』に
おけるリアリズム、メタフィクション、脱構築——

大 勝 裕 史

1 序

ヴェトナム戦争を題材にした小説は夥しく存在するが、ヴェトナム戦争の帰還兵であるティム・オブライエン (Tim O'Brien) の『本当の戦争の話をしよう』(*The Things They Carried*, 1990) ほどに技巧的な作品は恐らくない⁽¹⁾。ヴェトナム戦争小説は一般に、帰還兵自身の戦争体験に基づいた生々しいリアリズムを特徴としている。しかし本テキストは一方で帰還兵にしか書けないと感じさせるような高度なリアリズムの相を持ちながら、他方でそのリアリズムを覆すようなメタフィクションの相を持ち合わせているのだ。

そこで本稿の目的は、テキストにおける背反的な相を読者反応論的に論究することになる。本節では予備作業として、物語の構造を確認した上で、論点を整理しておく。まず一般的な物語構造を述べよう。物語はすべてヴェトナム戦争の米軍兵士であり現在は帰還兵の作家ティム・オブライエンによって一人称で語られる。物語は22の独立した章から構成され、一見すると短編集のような断片の集積に見えるが、登場人物は共通し、各章で語られる出来事は原則的に整合性を持つ。ただし、物語の時間と空間は章ごとに、さらには章の内部でも、かなり断片化されている。つまり、物語は全く時系列に従わず、章ごとにまたは章内で、戦中のヴェトナムと戦後のアメリカがしばしば唐突に入れ替わるのだ。

以上の一般的な物語構造に加えて、本稿の議論に有効だと思われる物語の区分も検討する必要があるだろう。トビー・ヘルツォーク (Tobey Herzog) は、本作が「虚構の自伝」として「三重の形式」を持つと述べる。すなわち、第一に“autos”、つまり「語り手の内的生活 (inner life of the narrator)」⁽²⁾、第二に“bios”、つまり人々や出来事と遭遇する語り手の人生、第三に“graphein”、つまり書き方に関する自己言及的な注釈である (Herzog[1997] 113)。言い換えれば、テキストは個人的な想像 (フィクション)、出来事の再現 (回想記)、書き方についての自己言及的な考察 (メタフィクション) という三要素に分類可能だというのだ。

しかし、フィクション (虚構) と回想記 (事実) の区分に関しては、語り手オブライエン自身が両者の相互排他的な区別を否定している。記憶と想像との不可避的な相互浸透、すなわち出来事を見たままに記憶しようにも想像力が混入してそれを歪めてしまう事態を、オブライエンは

「記憶の交通 (memory traffic)」という隠喩で表す (TTTC 34)。したがってヘルツォークの三要素を冒頭で言及した二つの操作概念に接合すれば、リアリズムに対応する物語表象 (autos, bios) とメタフィクションに対応する表象批評 (graphein) という二要素に分けて、テキストを見ていくのが適当だろう。

では論述の見通しを述べておこう。第二節ではテキストにおいてリアリズムを前景化させる契機が、第三節ではリアリズムを突き崩すメタフィクションを前景化させる契機が論じられる。読者に対してまずテキストの意味内容を信頼させながら、次に信頼を崩壊させるというテキストの戯れ的な所作が、ここで考察されるだろう。第四節ではそれらの考察を踏まえて、テキストの所作を脱構築的に解釈してみたい。

2 リアリズム

テキストの分析に入る前に、本稿が使用するリアリズムという操作概念を明確にしておく必要がある。『現代思想芸術事典』はリアリズムを、作品と作品の表象するものとの間にある「類似性や迫真性 (resemblance or verisimilitude)」によって機能する様式だと説明している (Edgar and Sedgwick 329)。つまり、テキストという言語形式がテキストの外にある世界という内容に対応していることがリアリズムの条件なのだ。この点でリアリズムはミメシス、つまり芸術は自然を模倣すべしという規範を遵守する様式だと言えるだろう。

だがリアリズムのテキストが実在を模倣するといっても、テキストの作者も一つの主観であるので、事物を公平無私に正確に記述できないだけでなく、むしろ記述することで事物の新しい像 (意味) を創造してしまうだろう。つまり、(実在する) 対象の正確な記述は、(対象の) 意味の創造を不可避免的に帰結してしまうのだ。リアリズムだけでなく言語表現一般の抱えるこの問題を、パトリシア・ウォー (Patricia Waugh) は「創造／記述の逆説 (creation/ description paradox)」と呼ぶ (Waugh 88)。

「創造／記述の逆説」を孕むにもかかわらず、リアリズムが文学形式として破綻なく成立してきた理由の一つに、リアリズムのテキストが創造性を抑圧し対象の正確な記述を装うという傾向が挙げられる。これはフレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) が「封じ込め戦略 (strategies of containment)」と呼ぶものだ。「封じ込め戦略」は「再現＝表象の対象に、形式的統一性をあたえようとする (seek to endow their objects of representation with formal unity)」 (Jameson 54)。この戦略は特にリアリズムに認められるだろう。すなわち、リアリズムは「封じ込め戦略」を用いて、一つの事実、自然であろうとするのだ。

こうした封じ込め戦略を暴くためには「封じ込め戦略が暗示すると同時に抑圧する全体性の理念と直面すること (confrontation with the ideal of totality which they [the strategies of containment] at once imply and repress)」が必要だとジェイムソンはいう (Jameson 53)。た

だしテキストが「封じ込めの戦略」を有効にするためには、まず境界を画定するはずである。境界を引いてはじめて、境界の内部だけを全体性として表象しつつ、境界の外部を抑圧、無効化しうるからだ。だが *TTTC* の全体化はより精妙である。このテキストは単に事実に見せるだけでなく、テキスト内部に虚構と事実という階層を設定することで、全体化を志向するからだ。

そこで以下では「封じ込めの戦略」が機能することで、物語があたかも自然で事実的なものに、つまりリアリズムとして現れる過程を分析することになる。論点を先取りすれば、その過程は伝記的事実の利用、描写による現実効果、語りによる虚実の境界画定という三点から分析されるだろう。

一点目は作者の伝記的事実に関わる。通常の読者であればテキストを読解する前に、作者ティム・オブライエンがヴェトナム戦争の帰還兵だという伝記的情報に触れるはずだ。例えば現在入手可能なブロードウェイ版の表紙を見てみよう。ニューヨーク・タイムズの書評が引用されて「ヴェトナム」の文字が確認できる。また *Going After Cacciato* の著者であることも記されている。こうしてテキストは物語以前に、作者がヴェトナム戦争について書き続けている帰還兵だという事実を参照するよう促すのだ。この伝記的事実の意味は大きい。というのも、マリタ・スターケン (Marita Sturken) によれば、ヴェトナム戦争というトラウマ的な出来事の生存者である帰還兵に対して、アメリカ社会は戦争の真実を語ることを強く期待しているからである (Sturken 68)。このようにして読者は、帰還兵の書いたテキストだという前提で、つまり物語が正真正銘の戦争体験に立脚 (一致ではない) するという想定のもとに、読解を始めるだろう。

また、本を開くとタイトルページ、出版情報の次に献辞がある。「本書はアルファ・カンパニーの男達に捧げられる。中でもジミー・クロス、ノーマン・バウカー、ラット・カイリー、ミッチェル・サンダース、ヘンリー・ドビンス、カイオワに。(This book is lovingly dedicated to the men of Alpha Company, and in particular to Jimmy Cross, Norman Bowker, Rat Kiley, Mitchell Sanders, Henry Dobbins, and Kiowa.)」本を読む常識として、献辞の対象は実在の人物のはずだから、これらの人物 (小説の登場人物でもある) は実在の人物として認識されるだろう。

二点目は描写の問題である。物の端的な描写がテキストの随所に見られるのだ。第1章 “The Things They Carried” では、「P-38缶切り (P-38 can openers)」「認識票 (dog tags)」「C型携帯口糧 (C rations)」といった一般的な「兵士の荷物」に始まり、その後も数ページに渡って、登場人物がその個性に応じて携帯する私物や、小隊での役割に応じて運搬する武器弾薬が、具体的な重量と共に執拗に列挙される (*TTTC* 2)。例えば、太ったドビンスは多めの食料と23ポンドの M-60マシンガンに約15ポンドの弾薬を、ネイティブ・アメリカンで敬虔なバプティストのカイオワは新約聖書を携帯するというふうに。

こうした物の端的な記述は、少なくとも物語の構造上は無機能であるが、ロラン・バルト

(Roland Barthes) のいう「現実効果 (reality effect)」を持つと考えられるだろう。現実効果とは、物語の構造に従属せず、細部を細部として報告するだけで諸物が「かつてそこにあったこと (having-been-there)」を示す機能である (Barthes 147)。ここで、言語は差異の体系であり、記号は指示対象に一致しないのだと強弁することはたしかに可能だ。しかし帰還兵によるテキストだという前提に立つとき、これらの表象が帰還兵の体験した事物を指示するという信頼 (確信ではない) を、読者のうちに生じさせると言っても過言ではあるまい。

第三に、これが一番重要だが、第一節で指摘したようにテキストにはナラティブの系とでも呼ぶべき章同士の有機的な連関がある。それは “Speaking of Courage”、“Notes”、“In the Field” という連続する三つの章だ。テキストの叙述順に詳しく見てみよう。

“Speaking” は戦後の物語である。ヴェトナムでオブライエンと同じ中隊に属した帰還兵パウカーは、シボレーで湖を周回しながら戦友カイオワを失った汚濁の記憶を思い出しているが、実際にはその記憶を誰にも語れないでいる。汚濁の記憶とは以下のようなものだ。小隊が野営した平原は現地民のトイレだった。雨が降って平原は糞尿と泥の沼と化す。そこに敵襲が始まる。汚物にまみれながら砲弾の集中砲火を浴びる極限状況で、パウカーの隣にいたカイオワが被弾してしまう。だがパウカーは口、鼻、目に入り込んでくる汚物の不快さに屈して、目の前で沼に沈んで行くカイオワを助けられなかった。身体に染み付き固着した汚物の臭いと味、カイオワを見捨ててしまった罪悪感、不快さに負けた屈辱感などが複合した記憶を、パウカーは「糞平野 ([a] shit field)」と表象する (TTTC 146)⁽²⁾。

続く “Notes” では、前章 “Speaking” をオブライエンが書いた動機、経緯が書かれる。創作動機を与えたのは戦友パウカーからの手紙だった。手紙の中で、パウカーは糞平野の記憶を共有するオブライエンに混乱した心情を吐露する。彼にとって戦争の真実に他ならぬ糞平野の記憶こそが、帰還後のパウカーに無為な生活を強いていたのだ。パウカーは「くそ (shit)」「くず (crud)」という汚い言葉で戦場の記憶を表象するが、実際にはその内容を誰にも語れない (156, 157)。そして糞平野について語りえない自分に代わって、パウカーは作家となったオブライエンにその物語を書くように頼む。オブライエンはこの手紙に衝撃を受ける。自分がハーヴァードの大学院生を経て作家となり社会的成功を収めているのに対して、戦場で辛い経験を共有した仲間が帰還後も苦悩しているという事実と直面したのだ。オブライエンはパウカーの悲痛な願いに応じて物語を書いたが、出版された物語を読んだパウカーは内容に失望し、ついに自殺してしまう。糞平野について沈黙したまま自殺したパウカーのために、再び書き直した物語が前章だったのである。

次の “In the Field” は戦中の物語だ。時間的には “Speaking” でパウカーが回想したカイオワの死の後日談である。砲撃が止んだ翌日、糞平野に沈んでしまったカイオワの亡骸を、小隊の皆が捜し出すというものだ。

上で要約したナラティブを時系列に沿って再構成すれば以下の通りだ。ヴェトナムの戦場でカ

イオワが戦死し（“Speaking”の回想部分）、小隊の仲間がパウカーの遺体を捜し出す（“In the Field”）。次に戦後、カイオワの死に罪悪感を抱き続けるパウカーの無為な日常が描かれ（“Speaking”）、彼はオブライエンに手紙で罪悪感を述べて自殺する（“Notes”）。そしてオブライエンはパウカーの自殺に衝撃を受け“Speaking”という物語を書いたのである（“Notes”）。

ここで注目したいのは、“Notes”の存在論的地位である。“Speaking”という虚構作品に対して、“Notes”が創作過程に相当するのは明らかだ。すなわち、“Notes”は“Speaking”に対してリンダ・ハッチョン（Linda Hutcheon）のいう「準テキスト（paratext）」に相当する。「準テキスト」とは例えば脚注、副題、はしがき、エピローグ、エピグラフなど、テキスト本体の外部にある形式を指す（Hutcheon 89-88）。とりわけ重要なのは、準テキストがテキストに外在して相対的に事実的、歴史的な地位を占めることで、虚構と事実の境界線を画定するように機能する点だ。したがって、しかじかの事情で作者が虚構作品を創作したという具合に、相対的に事実に基づいているかに読める“Notes”の記述は、“Speaking”という虚構作品の創作動機、創作過程を明かすことで、“Speaking”の虚構作品としての地位を外側から固める実質的な「後書き」として機能するだろう。また“Notes”の中で語り手オブライエンが *If I Die in a Combat Zone* と *Going after Cacciato* の著者だと明示することから、“Notes”の語り手であり“Speaking”という作品内作品の作者としてのオブライエンが、本の表紙が参照を促すテキストの外部に実在する作者と等号で結ばれる。すなわち、テキストから含意される限りでの作者像である「内包される作者（implied author）」と、テキストの外部に存在して本の印税を受け取る実作者とが、読者の認識の中で同一化されていく。このように“Notes”は、テキストの内部にテキストと準テキスト、すなわち虚構と事実との安定した階層を設定し、また準テキストの（擬似的な）事実性をテキスト外部の伝記的、歴史的な事実へと円滑に接合してゆくのだ。

以上のように本節では、テキスト外的な自伝情報、テキスト内的な描写、語りに分けて、読者がテキストをリアリズムとして、すなわちあたかも事実が語られているかのように信頼してテキストを読む契機を分析してきた。次節で検討するのは、この信頼が突き崩される過程である。

3 メタフィクション

メタフィクションとは、自らの「創作過程（fiction-making process）」を織り込んだテキストである⁷³。前節で論じたりアリズムは虚構性を読者に感じさせまいとする美学的戦略を持つが、メタフィクションは虚構性を隠さないどころか暴露しようとする。ではメタフィクションはいかなる読者反応を引き起こすのだろうか。ここで分析哲学者コリン・マッギン（Colin McGinn）の「虚構的没入理論（fictional immersion theory）」を参照しよう。

マッギンによれば、映画や小説といった虚構作品を認識する主体の意識には、二つの志向性が含まれる。一つは、自分が本を読んでいるといった現実世界に対する知覚、つまり「知覚的志向

性 (perceptual intentionality)」だ。もう一つは、本に書かれた物語という虚構世界に没入する作用、つまり「虚構的志向性 (fictional intentionality)」である。読書において二つの志向性は次のような関係になる。そもそも知覚的志向性は虚構的没入の前提条件であるが（実在する本がなければ本の世界を想像できない）、夢の場合と違って、我々は虚構世界を現実世界と取り違えたり、虚構世界に完全に没入することはない（小説の中で殺人事件が起きても、我々は警察に通報しない）。にもかかわらず、虚構世界に同化する、いわばその世界を「生きる」ようなとき、意識の中で眼前の本を読んでいるという知覚的志向性は後退し、あたかも現実世界の出来事であるかのように、虚構世界の物語に喜怒哀楽を感じるほど強く「入って」しまえる。他方で、虚構に没入する主体に対して知覚的志向性を前景化させる（映画を観て怯える子供に対して母親がただの映画だと諭す）ように促せば、虚構的没入からの「覚醒 (ascent)」が生じるのだ (McGinn 103-12)。

ここで重要なのは二点である。一つは、虚構的志向性と知覚的志向性が反比例の関係、すなわち一方が前景化すれば他方は後景化するような関係にあることだ。もう一つは、虚構的没入に際しても、我々は虚構世界と現実世界との相対的区分を心のどこかで保持し、知覚的志向性を完全には排除できないことである。したがって、虚構世界に没入するとは、別言すれば虚構世界の存在を「信頼」することだといえる⁽⁴⁾。ここで信頼という語を使うのは、我々が知覚的志向性を保持しつつ、虚構世界の存在を敢えて信じるからである。本稿の文脈では、リアリズムの読者効果こそ擬似事実的な物語への信頼に基づく虚構的没入であり、メタフィクションの読者効果は知覚的志向性の前景化によって、物語への信頼を懐疑させ、虚構的覚醒を生じさせることである。

メタフィクションが虚構的覚醒を誘発する方法としては、ウォーのいう「枠組破壊 (frame-breaking)」が有効である。メタフィクションが白日の下に曝そうとするのは「枠組化作用 (framing)」、つまり「枠組 (frame)」によってテキストが構築されているという事実である。特にリアリズムに妥当することだが、枠組はテキストを構築しているにもかかわらず自然化、抑圧されるので、読者に意識されにくい。そこで、メタフィクションは敢えて枠組を破壊することで、枠組が存在した事実を読者を直面させようとするのだ。ここまでは枠組破壊の明示的な帰結であるが、暗示的な帰結もある。テキストが言語的な枠組化の所産であることを暴露することで、同じように言語的に構築されているテキスト外の現実に対しても読者の意識を向けさせる。このようにしてメタフィクションは、現実も虚構と同様に枠組化、構築されたものであることを暗示し、事実と虚構との二項対立を脱構築するのだ (Waugh 28-31)。

以上の予備作業を念頭にテキストの分析に入ろう。枠組とは最も簡単に言えば言語であり、また文学的な各種の形式、慣習などが含まれる。前節で確認した通り、“Speaking”、“Notes”、“In the Field”という連続する章の枠組とは、大雑把に言えばリアリズムであり、厳密に言えばテキストと外的な世界との連続性に対する読者の信頼であった。実際に、これらの章の「枠組化作用」

は絶妙といえる。テキストは単に事実的な地位を信頼させるだけでなく、恐らくは物語の中に読者を感情的に強く惹き込むのだから。

しかし “In the Field” の直後に来る “Good Form” はまさに枠組破壊の章だ。冒頭で語り手は物語の虚構性を告白する。

It's time to be blunt. ... Almost everything else is invented. But it's not a game. It's a form. Right here, now, as I invent myself, I'm thinking of all I want to tell you about why this book is written as it is. (*TTTC* 179)

ここで、オブライエンは読者に対して本当のことのよう語って信じさせた内容を、でっち上げだと告白して疑わせる。さらに述べる。

I want you to feel what I felt. I want you to know why story-truth is truer sometimes than happening-truth. (179)

つまり、語り手＝私の心情を読者に感受させるためにこそ、「出来事の真実」、すなわち体験を通じて得られた事実を忠実に再現した真実よりも「物語の真実」、つまり脚色を加えた物語を通じた真実を重視するというのだ。

引用の通り、語り手は前章までの虚構性を暴露し、物語の構成原理を解説している。その物語構造上の機能は、テキストに外在的な準テキストとして、より実在の作者に近い審級からテキストを注釈するという機能だとみなせるだろう。ここで我々読者は、虚構的没入から急激に覚醒させられると同時に、前節で確認した虚構と事実との安定した境界を再び引き直さねばならなくなるのだ。

章の相互配置も大きな効果を持つだろう。物語の虚構性を暴露する “Good Form” は、“Speaking”、“Notes”、“In the Field”、“Field Trip” という、二人の戦友の死をめぐる緊密に関連するナラティブの途中に位置する。“Good Form” は “Speaking” に始まるナラティブの自然な流れ、すなわち物語が持つ強力な抒情性や事実としての地位を、強引に切り崩すように挿入されているのだ。

このように、“Good Form” という章は明らかに読者の認識に混乱をもたらす。親友への哀悼を表象したナラティブの醸成する叙情が宙吊りにされ、虚実の境界線が不安定化されることで、物語への信頼は懐疑に、認識は混乱に陥るだろう。実際に先行研究の多くが、事実のように語った後で虚構性を暴露する「信頼できない語り」による読者効果（本稿が虚構的覚醒と呼ぶもの）を論じている^{『6』}。

一般的な読者もまた、こうした虚構性暴露によって認識の混乱を経験するだろう。それを傍証

する事実がある（テキスト内ではなく実在の出来事）。ある大学で開かれた講演会において実作者オブライエンは、徴兵通知を受け取り、戦争が誤りだとする明確な政治信条を持ちながらも、保守的な町の空気に逆らえずにやむなく戦場へ行った経緯（“On the Rainy River”の章と同内容）を語った。だが実作者オブライエンは最後に「全ては創作であるが、絶対に本当だ（All of it is made up, and all of it is absolutely true）」と述べたという（qtd. Ringnalda 103）。次の瞬間、聴衆は混乱に陥り、例えば最前列で真剣に聞き入っていた一人の学生は今まで熱心に取り組んでいたノートの字を消し始めたという（102-3）。虚構性の暴露と聴衆の反応が示すのは、事実だと思っていた話に感動しているとき、その話が虚構だと知らされれば読者の感動は水を注され、認識が混乱させられることだ。

このように、読者の虚構的没入はテキストに織り込まれた批評によって相対化され、読者は虚構的覚醒を余儀なくされる。ではこうしたテキストの所作はいかなる意味を持つのだろうか。この問いに対して認識の混乱に留まらず積極的に答えようとするならば、テキストの意味を敢えて言えば一つの誤読として独自に探求する必要があるだろう。本稿が次節で展開したいのは、そのような積極的解釈だ。

4 脱構築

前節で確認した通り、「信頼できない語り」によってテキストは、虚構と事実の境界線上で読者を幻惑する。実は、こうした所作はテキスト中に組み込まれている。このような脱構築的な所作を検証しながら、テキストから戦争の表象に関する一つの倫理を導出することが、本節の試みとなる。“How to Tell a True War Story”という章は強力な具体例となろう。同章はこれから試みるテキストの脱構築的な読解にとっても示唆的である。

章題それ自体が注目に値する。まず、（字義的な）疑問文と修辭疑問文との判別不能性を主張するポール・ド・マン（Paul de Man）に倣って、題意を敢えて修辭的に解すれば「いかにしても語れない」と取ることもできよう（de Man 128-29）。またミルトン・ベイツ（Milton Bates）の指摘するように、章題の動詞“tell”は「語る（narrate）」の意味としても「認識する（recognize）」の意味として解釈可能である（Bates 248）。このように章題は、二×二で四通りの解釈が考えられるのだ。すなわち、「戦争の物語をいかに語るか／読むか」という可能性の探求、「戦争の物語を語れない／読めない」という不可能性の提示である。以下で示すように、同章の内容が、さらには *TTTC* というテキストが、四通りの題意の並存を支持しているだろう。

同章は入れ子型の物語構造により、ある「物語内容（story）」と「物語行為（narrating）」の失敗とを同時に提示している³。入れ子構造とは、語り手オブライエンが、自分が講演会で水牛の話（二次的物語内容）を聴衆に語ったという物語（一次的物語内容）を、読者に向けて語るという語りの重層構造である。「水牛の話」の内容は以下の通りである。まずレモンという兵士が

地雷を踏み、一瞬にしてばらばらの肉片と化してしまう。レモンの爆死を目撃した親友ラット・カイリーは、数日後、行軍中に遭遇した水牛に対して銃弾を乱射する。結局、水牛はその肉体を無惨に損壊され、生死すらも判別不可能な肉の塊にされた挙げ句に、小隊のメンバーによって井戸に打ち捨てられてしまう。オブライエンの語った内容は以上だが、一人の聴衆の反応が書かれている。年輩女性がオブライエンに近づいてきて「可哀想な赤ちゃん水牛 (poor baby water buffalo)」に感動したと言ってくるのだ (TTTC 84)。オブライエンは彼女に対して、いま語った話がすべて虚構だと告げるのだった¹⁷⁾。

ここで物語行為は、物語内容の核心を伝達するという点で、明らかに失敗している。なぜなら、オブライエンが書いている通り、物語の核心は親友を失った「ラットの哀しみ (his grief)」なのだから (85)。だとすればこの女性は、マーク・ヒーバル (Mark Heberle) の評する通り「善意だが主題を理解しない聞き手 (well-meaning but theme-deaf listener)」だと言えよう (Heberle 190)。

このように “How to Tell” は、語り手が語り、聞き手が聞く物語内容を提示しながらも、語り聞くという物語行為の失敗をも組み込むことで、戦争を語り聞くことの可能性と不可能性とを同時に示していると言えるのではないか。

次に検証したいのは “Field Trip” という章だ。同章は、戦争の表象／解釈に関して歴史性を付加する寓話となっている。戦友の死を巡るナラティヴの連続と言うべき “Field Trip” は、語り手自身が物語の虚構性を暴露した “Good Form” の直後に、何事もなかったように始まる。43歳になった作家オブライエンは、娘キャサリンを連れてヴェトナムを約20年ぶりに再訪し、カイオワが戦死した平野まで行き、彼が没したまさにその場所に遺品を沈めるのだった¹⁸⁾。

ここで注目すべき文献学的事実がある。1990年に出版されたシーモア・ローレンスの初版では遺品が「手斧 (hatchet)」だったのに対し、現在入手可能なテキストでは「モカシン (moccasin)」に修正されているのだ (Dunnaway 117)。変更による寓意は明らかである。手斧を沼に沈める行為は、「和睦」を意味する慣用句「手斧を埋める (bury the hatchet)」を連想させるが、手斧をモカシンに変更すれば和解の含意はなくなる。以下で証示するように、重要なことは、たしかに本章ではヴェトナム戦争の一つの終りが描かれるが（それはオブライエンにとって一つの精神的な安らぎを意味する）、その終りにはまるで亡霊のように終らないものが憑依していることなのだ。

戦友カイオワの遺品であるモカシンを彼が没したまさにその場所に沈めることで、オブライエンはカイオワに対する喪の作業を果たす。ナラティヴの連続性を考慮すれば明らかのように、この喪の作業はカイオワのみならず、カイオワの戦死に帰還後も罪悪感を抱き続けて自殺した戦友バウカーにも向けられているはずだ。喪の作業を終えたオブライエンは、「戦争は終わったのだ (the war was over)」と胸を撫で下ろして放心状態にしばし陥る (TTTC 187)。しかしその直後

に、付近にいた一人のヴェトナム人農夫の描写が続く。

Fifty meters up the field one of the old farmers stood watching from along the dike. The man's face was dark and solemn. As we stared at each other, neither of us moving, I felt something go shut in my heart while something else swung open. Briefly, I wondered if the old man might walk over to exchange a few war stories, but instead he picked up a shovel and raised it over his head and held it there for a time, grimly, like a flag, then he brought the shovel down and said something to his friend and began digging into the hard, dry ground. (187)

オブライエンとこの農夫との対比は、キアロスクーロのように印象的な対比となっている。農夫に記述が焦点化される前にオブライエンは、沼の中へ泳いでいき「柔らかな底 (the soft bottom)」にモカシンを沈めていた (186)。対照的に、この農夫は「堅く乾いた地面 (the hard, dry ground)」にシャベルを振り下ろす⁽¹⁸⁷⁾。また「輝く八月の陽光 (bright August sun)」の下でオブライエンが安らぎを感じるその直後に、農夫の「暗くこわばった (dark and solemn)」表情が立ち現れるのだ (187)。

引用した対比の寓意は次のように解釈できるだろう。喪の作業を果たしたオブライエンが感じる「閉じたもの」が、戦争の一つの終りを象徴しているとすれば、彼が同時に感じる「開いたままのもの」は、農夫の冷淡な存在にも象徴される戦争の決して終わらない側面を表しているのではないだろうか。また「閉じたもの」が傷に対する治癒の可能性を含意するとすれば、「開いたままのもの」は治癒の不可能性を含意しているのではないか。

これまでの議論をいったん整理しよう。“How to Tell”の含意は、表象／解釈の可能性／不可能性の併置であり、また“Field Trip”の寓意は戦争の終結可能性に対する終結不可能性の憑依であった。このようにテキストにおいて、ある意味の可能性、肯定性には常に不可能性、否定性が併置されているのだと、ひとまず整理できよう。

こうしたテキストの背反する所作は脱構築的だと言える。ジャック・デリダ (Jacques Derrida) によれば、脱構築の運動は外部から構造を破壊するのではなく、構造に「内在すること (inhabiting)」で効力を持つ (Derrida 24)。すなわち、安定して見える構造にも、それを不安定化させるような脱構築の動きが常に既に内在しているのだ。だとすれば、リアリズムとメタフィクション、表象／解釈の可能性と不可能性、戦争の終結可能性と不可能性というふうに、一方で自らの構造に内在する脱構築の動きを抑圧して意味の充溢を志向するかに見えながら、他方で自ら脱構築を顕在化させて構造を動揺させる点で、テキストは極めて脱構築的である。いわば、このテキストは「自動不安定装置 (built-in destabilizer)」を内蔵しているのだ。

この脱構築的所作を、戦争の表象、戦争をいかに語るかに関する寓意と取れば、物語は語りえぬものを示すために語るのではなく、語りながら語りえぬものを示しているといえるだろう。すなわち、前者はジャン・フランソワ・リオタール (Jean-Francois Lyotard) が「崇高の美学 (aesthetics of the sublime)」と呼ぶような、表象の表象不可能性への従属であるが、後者は表象と表象不可能性との併置なのである (Lyotard 81)。

ではなぜテキストは対立する契機を執拗に併置し、構造を自ら不安定化させ続けるのか。この問いに答えることで、戦争の表象／解釈について一つの倫理をテキストから導くことができるはずだ。ここで引用にある「他の何か (something else)」の意味を再考しなければならない。

テキストではオブライエンが、カイオワについて語れないパウカーに代わって物語を作り、またパウカーに代わってカイオワの喪の作業を果たす。そうしてオブライエンが安らぎ、つまり一つの終結可能性を感じるかにみえたその瞬間に、終結不可能な「他の何か」が現れていた。ここで「他の何か」が農夫の冷たい表情と無言の振る舞いにより喚起されていた点に注目したい。オブライエンにとってこの農夫は、代わりに語ることもできない、語り聞くという共通の地平も有さないような他者である。実際にオブライエンは、農夫との対話を一瞬期待しているが、その期待は成就しない。だとすれば、農夫の喚起する「他の何か」は、フロイトを参照してこう言えよう。仲間の喪によって終る「何か」は、不可避免的に「他の何か」を抑圧してしまう。この「他の何か」が、抑圧されたものの回帰、すなわち「無気味なもの」として農夫の顔に表出しているのだと (Freud 147-48)。このように、戦後20年経った時点でオブライエンの遭遇した、かつての敵だったかもしれぬ農夫が喚起する「他の何か」とは、語り聞くという地平すら共有できない、交通不可能なほどに懸隔した他者の経験、歴史ではないだろうか。

さらに「他の何か」が開かれたままである点も重要である。「他の何か」として暫定的にしか表象できないのは、それを十全に表象／認識することが不可能だからだ。にもかかわらずそれは、表象／認識の不可能性に還元すること（わからないものとして放棄すること）もできないような他者の経験、歴史の闇を暗示するのではないか。そして、不可能性に還元不能な「他の何か」が、逆説的に、我々読者にヴェトナム戦争を表象／認識することを再び考え実践するように触発するのではないだろうか。

テキストから導出すべき戦争の表象／解釈の倫理はここにある。オブライエンは言う。「本当の戦争の話をただ語り続ければ、それを語るができるかもしれない (You can tell a true war story if you just keep on telling it.)」(TTTC 85)。これを修辭的に解釈してみよう。戦争の話を読み知ろうとし続ければ、本当の戦争の話を読み知ることができるかもしれないと。ただし、テキストが示唆し続けるように、知の可能性には不可能性が憑依し続け、また我々は不可能性に還元不能な他在性に対して開かれている必要がある。しかしだからこそ、いま一度、知の可能性に賭けることを要請されているのだ。すなわち「もう一度、辛抱強く語る／知ること ([to]

tell it one more time, patiently)」が必要なのだ (TTTC 85)。

Notes

- (1) John Newman の書誌学的な研究によれば、1964年から1995年までの期間に出版された、ヴェトナム戦争を扱ったフィクション作品（小説、短編、戯曲、詩、その他を含む）の総数は1370に達する。また小説だけに限定すれば、テキストの出版された 1990年までにヴェトナム戦争に関する小説は545冊存在した (Newman)。
- (2) このような極限的な戦場の描写は、生井英孝が「泥沼の狂気 (madness in the mudness)」と表現するヴェトナム戦争の通俗イメージと合致しているだろう (生井 55-56)。
- (3) Larry McCaffery によれば、メタフィクションは自己言及的に「創作過程 (fiction-making process)」、つまりテキストがどういった「物語の前提や習慣 (narrative assumptions and conventions)」により形成されているかを検証することで、テキストの外部にある「現実性 (reality)」や「意味作用の体系全て (all our meaning system)」が構築される過程をも類推的に示そうとする (McCaffery 5-7)。
- (4) 虚構的没入が虚構への信頼であるとは、文学批評の歴史において前例のない見解ではない。コールリッジのいう「不信の積極的な停止 (willing suspension of disbelief)」もその一例だ。
- (5) Maria Bonn は「信頼できない語り」が読者に「虚構と真実についての前提 (assumptions about fiction and truth)」を問わせると指摘する (Bonn)。Milton Bates も「信頼できない語り」が読者に物語の魅力から距離を取らせ、「道徳的、政治的な気付き (moral and political education)」を促すという (Bates 253-54)。逆に、テキストにおける虚構的没入のみを高く評価する批評にとって、虚構的覚醒は踵きの石となる。例えば Clayton W. Lewis は、メタフィクションが「出来事が経験され、記憶されている通りに表現されているのを聞きたい欲求 (one's appetite to hear what happened rendered as it was experienced and is remembered)」を阻害すると不満を述べている (Lewis 302)。
- (6) Herzog も同様のエピソードを報告している。実作者オブライエンは講演会で、“On the Rainy River” と同内容の話をして観客が聞き入り静まり返った最後に、今まで語った全てが自分の創作だと述べたという。聴衆の一人だったある帰還兵は講演後に、講演を企画した Herzog に対してオブライエンの不誠実を訴えたという (Herzog[2000] 893-95)。
- (7) 疑問文と修辞疑問文との決定不可能性の例として、人気ドラマのキャラクター Archie Bunker の台詞 “What’s the difference?” を de Man は挙げている。この疑問文は「違いは何か」という字義通りの意味 (literal meaning) なのか、「違いが何だろうと構わない」という修辞的な意味 (figurative meaning) なのか、意味を確定できないというのだ。
- (8) 「ナラティブ」「物語行為」「物語内容」の区別は Gérard Genette に依拠している。Genette はいわゆる物語を三つの側面に分節化する。まず「ナラティブ (narrative)」とはシニフィアンとしてのテキストそれ自体を指し、意味を産出する「物語行為 (narrating)」、すなわち「語り」を通じて、シニフィエとしての「物語内容 (story)」が生まれるとされる (Genette 26-27)。
- (9) このときオブライエンが年配女性に憤慨して、口には出さないが “dumb cooze” と思ひ浮かべるという記述がある (TTTC 85)。Lorrie N. Smith は、思いやりのある女性的な解釈に対する性差別的な表現を批判している (Smith)。
- (9) 実在の作者オブライエンに誤はない。また作中でオブライエンは二回銃弾を受けたことになっているが、実際には一度だけである (Herzog[1992] 114)。テキストは明らかに作者の伝記的事実に反する部分を含んでいるのだ。
- (10) 農夫と土との関連は、ヴェトナム戦争時代にヴェトコンが地面に穴を掘って活動し、地雷をもって米兵を攻撃したことを想起させる。

Works Cited

- Barthes, Roland. *The Rustle of Language*. Trans. Richard Howard. New York: Hill and Wang, 1986.
- Bates, Milton. *The Wars We Took to Vietnam: Cultural Conflict and Storytelling*. Berkeley: California UP, 1996.
- Bonn, Maria S. "Can Stories Save Us? Tim O'Brien and the Efficacy of the Text." *Critique: Studies in Contemporary Fiction* 36.1 (1994): 2-15. Literature Online. Waseda University Library. 10 Sep. 2009 <<http://www.gale.cengage.com>>.
- De man, Paul. *Allegories of Reading: Figural Language in Rousseau, Nietzsche, Rilke, and Proust*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Derrida, Jacques. *Of Grammatology*. Trans. Gayatri Chakravorty Spivak. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1997.
- Dunnaway, Jen. "'One More Redskin Bites the Dirt': Racial Melancholy in Vietnam War Representation." *Arizona Quarterly* 64.1 (2008): 109-29.
- Edgar, Andrews, and Peter Sedgwick, ed. *Cultural Theory: The Key Concepts*. London: Routledge, 2002.
- Freud, Sigmund. *The Uncanny*. Trans. David McIntock. New York: Penguin, 2003.
- Genette, Gérard. *Narrative Discourse: An Essay in Method*. Trans. Jane E. Lewin. Ithaca, New York: Cornell UP, 1983.
- Heberle, Mark. *A Trauma Artist: Tim O'Brien and the Fiction of Vietnam*. Iowa City: Iowa UP, 2001.
- Herzog, Tobey C. *Tim O'Brien*. New York: Twayne, 1997.
- . "Tim O'Brien's 'True Lies' (?)" *Modern Fiction Studies* 46.4 (2000): 893-916.
- . *Vietnam War Stories: Innocence Lost*. London: Routledge, 1992.
- Hutcheon, Linda. *The Politics of Postmodernism*. London: Routledge, 2002.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. London: Methuen, 1983.
- Lewis, Clayton W. "Chronicle of War." *Bloom's Guides: Tim O'Brien's The Things They Carried*. Ed. Harold Bloom. Philadelphia: Chelsea House, 2005.
- Lyotard, Jean-Francois. *The Postmodern Condition: A Report on Knowledge*. Trans. Geoff Bennington and Brian Massumi. Minneapolis: Minnesota UP, 1984.
- McCaffery, Larry. *The Metafictional Muse: The Works of Robert Cover, Donald Barthelme, and William H. Gass*. Pittsburgh: Pittsburgh UP, 1982.
- McGinn, Colin. *Mindsight: Image, Dream, Meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2006.
- Newman, John. *Vietnam War Literature: An Annotated Bibliography of Imaginative Works About Americans Fighting in Vietnam*, Third Edition. Lanham, MD: The Scarecrow Press, 1996.
- O'Brien, Tim. *The Things They Carried: A Work of Fiction*. New York: Broadway, 1994.
- Ringnalda, Don. *Fighting and Writing the Vietnam War*. Jackson: Mississippi UP, 1994.
- Smith, Lorrie N. "'The Things Men Do': The Gendered Subtext in Tim O'Brien's Esquire Stories." *Critique: Studies in Contemporary Fiction* 36.1 (1994): 16-40. Literature Online. Waseda University Library. 10 Sep. 2009 <<http://www.gale.cengage.com>>.
- Sturken, Marita. *Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*. Berkeley: California UP, 1997.
- Waugh, Patricia. *Metafiction: The Theory and Practice of Self-Conscious Fiction*. London: Routledge, 1984.
- 生井英考. 『ジャングル・クルーズにうってつけの日 ヴェトナム戦争の文化とイメージ』 筑摩書房, 1992.